

■ 追悼 ■

# 徳 ぶ

防衛医科大学校  
第一内科・教授

中 村 治 雄

伊藤喜三郎先生は、数多くのユニークさを持った方であった。

特にその考え方には、学ぶべき点が多かった。年齢の割には、と申し上げると大変失礼であるが、考え方は新鮮であり、スマートであった。

物を考える時に、私達は得てして、その事実の起る理由、是正の方策など、主としてその事実の周辺のことしか考えないが、伊藤先生は、必らず歴史的、社会的背景を含めて考えられ、その考えた事の波及効果をも推定されていた。

つまりきわめて広い視野に立って物事を考えられていたわけである。

「中村ドクター、お塔婆の木材は韓国の山から伐り出しているのです、禿山になってしまっていると聞いていますが、どう思いますか。」

とある総代会の日に、私の意見を求められた。何んとなく習慣であり、仏様に対する供養として捧げられていたお塔婆の出所について初めて耳にする話でもあり、隣国の山にそれだけ被害が及んでいるとは、夢にも思わなかった。

この質問に対しては、やっと、

「木で作ったお塔婆でなく、他のものにしてはどうでしょうか。」

と答え、さて、何かよい材料はないものかと考え込んでしまった。

一定の時間が経てば、くちはてる性質のものとして、



「泥で作ったらどうでしょう。」

「それはユニークかも知れない。字を書いたり、立てることができれば好都合だ。」

この点に関する伊藤先生との会話は、それ以来、なくなってしまう。

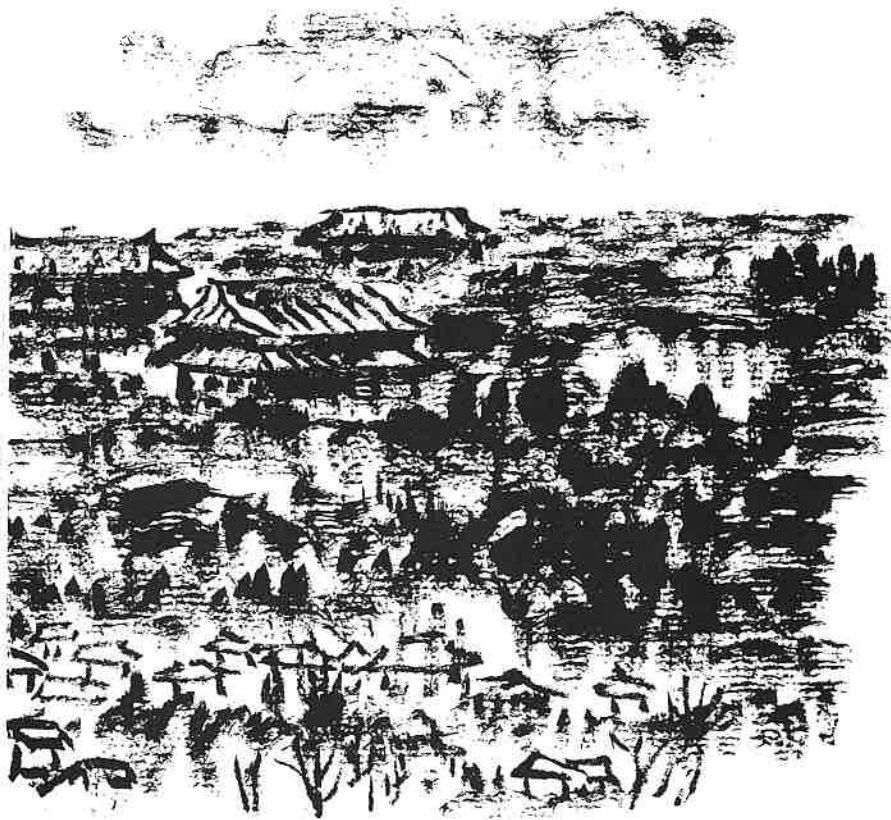
エコロジの立場から、いずれ真剣に考えなければいけない時期がくることは、兩人ともよく解っていた。

泥で作ったお塔婆が実際に利用できれば、善光寺の一つの特徴にもなろうし、木材資源の節約という面からも得策であろう。

これからの善光寺の発展を願って、おそらくエコロジの面からの特徴を加えることを、ひそかに伊藤先生は見守っておられるに違いない。

ここに謹んで御冥福をお祈りします。

(善光寺総代)





一九八〇年  
十二月十四日  
故宮畫院 謝雲

